



〔山形展〕令和3年度国立美術館巡回展 国立西洋美術館コレクションによる

「山形で考える西洋美術 —〈ここ〉と〈遠く〉が触れるとき」

2021年7月17日〔土〕—8月27日〔金〕 山形美術館

主催：国立西洋美術館、山形美術館、山形県、山形新聞・山形放送

共催：公益財団法人山形県生涯学習文化財団 | 後援：山形県教育委員会、
山形県芸術文化協会、山形市、山形市教育委員会、山形市芸術文化協会



〔高岡展〕令和3年度国立美術館巡回展 国立西洋美術館コレクションによる

「高岡で考える西洋美術 —〈ここ〉と〈遠く〉が触れるとき」

2021年9月10日〔金〕—10月24日〔日〕 高岡市美術館

主催：国立西洋美術館、高岡市美術館、富山県教育委員会、北日本新聞社

後援：富山県、高岡市、高岡市教育委員会、富山シティーエフエム

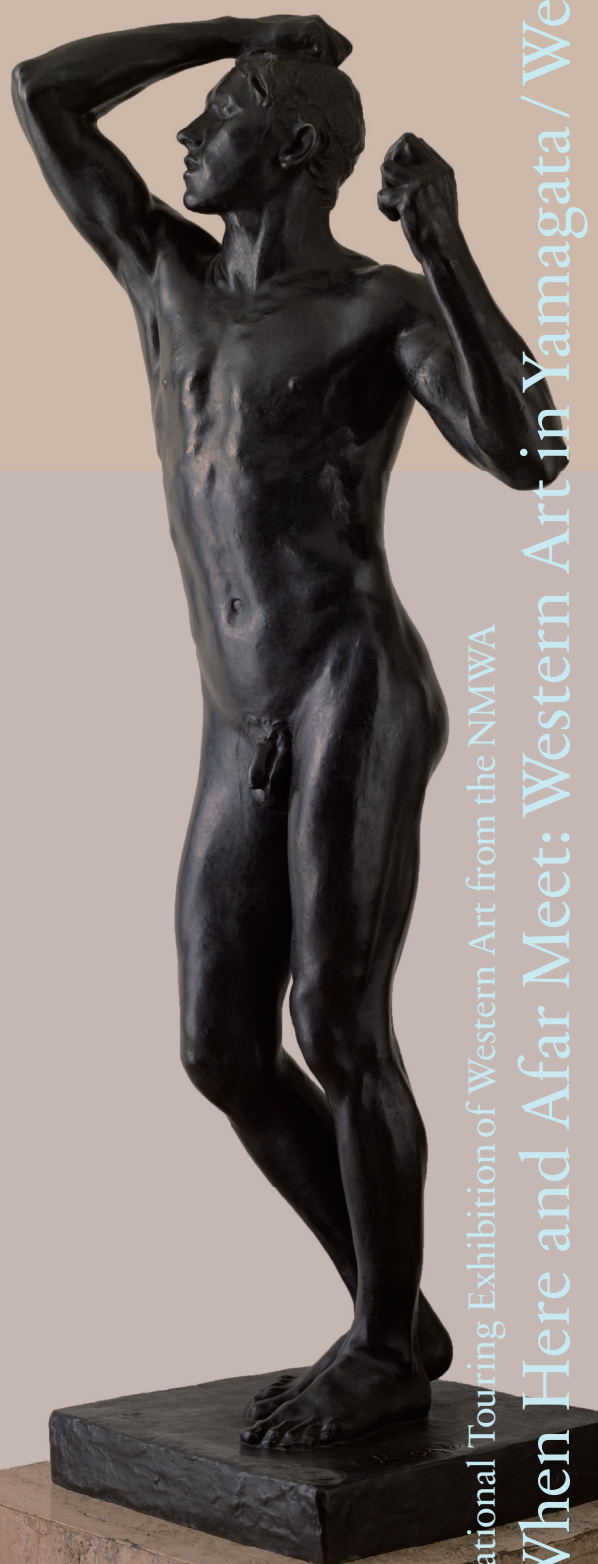
令和3年度国立美術館巡回展
国立西洋美術館コレクションによる

〔左上〕新海竹太郎《ゆあみ》1907年（原型）/1986年（鋳造）、
ブロンズ、山形美術館

〔左下〕「パリで制作中の本保義太郎（1907年頃）」写真、高岡市美術館

〔下〕オーギュスト・ロダン《青銅時代》1877年（原型）、ブロンズ、
松方コレクション、国立西洋美術館 | 撮影：©上野剛宏

山形で考える西洋美術 —〈ここ〉と〈遠く〉が触れるとき— 高岡で考える西洋美術



National Touring Exhibition of Western Art from the NMWA

When Here and Afar Meet: Western Art in Yamagata / Western Art in Takaoka

展覧会概要

独立行政法人国立美術館は毎年度、各館の持ちまわりで「国立美術館巡回展」を開催しております。このたび、山形美術館と高岡市美術館にて開催する「令和3年度国立美術館巡回展 国立西洋美術館コレクションによる 山形で考える西洋美術 | 高岡で考える西洋美術——〈ここ〉と〈遠く〉が触れるとき」では、国立美術館巡回展のこれまでの慣習や形式を押し拡げながら、国立西洋美術館のコレクションを、開催2館に巡回させるのみならず、それを両館の所蔵作品や多種の資料と各会場の複数のパートで並置し、双方向的に照らしあわせることを試みます。山形 | 高岡に特有の記憶に触れつつ、それぞれの地で別のものとして見えてくるであろう「西洋美術」について考えてみるためです。

つまりこの展覧会は、基本的には同様の作品のラインナップで山形美術館と高岡市美術館に巡回する国立西洋美術館のコレクションが、開催両館に所蔵される作品やその他の機関からお借りする資料などと、会場ごと別様に出逢うことで、組みあわせや構成を変え、ふた通りに分岐してゆくものとなります。その分岐の入口となるのは、ともに19世紀後半に生まれた山形出身の新海竹太郎と高岡出身の本保義太郎という、ふたりの彫刻家の記憶です。かつて彼らは、地元を離れて上京したのち、現在の国立西洋美術館が建つ上野界隈で彫刻を学び、やがて1900年代前半に渡欧留学を果たしました。それから半世紀以上が経った1959(昭和34)年、第2次世界大戦後にフランス政府より寄贈返還された松方コレクションを母体として開館した国立西洋美術館にはこんにち、新海や本保が西洋の地ではじめて実物に出くわした、ロダンやその他の新旧の芸術家たちの作品が数多く収められています。

国立西洋美術館のコレクションを、開催2館の所蔵作品と組みあわせて展示する理由は、ほかにもあります。もとより両館には、新海 | 本保だけに限定されない数々の地元作家たちの貴重な作品が所蔵されており、それらのなかにも、西洋の芸術の記憶なしには生まれえなかったものが、当然ながらたくさんあります。さらに山形美術館には、同館に寄託されてきた日本有数の西洋近代絵画群を誇る吉野石膏コレクションがあります。一方、戦後日本の公立美術館設立の嚆矢として知られる神奈川県立近代美術館と同じ1951(昭和26)年に開館し、今年2021年に記念すべき創立70周年を迎える高岡市美術館には、明治期に西洋と日本の芸術文化の先駆的な架け橋となった高岡生まれの美術商・林忠正の記憶が息づいています。

もちろん、ひとつの展覧会を開催地ごと、ふたつに分岐させるという展示の実験をおこなうのと同時に、あくまでも「国立美術館巡回展」の本義というべき、開催地の市民のかたがたをはじめとする来場者のみなさまに向けた西洋美術の親しみやすいご紹介を、展覧会全体としては展開いたします。山形で新海竹太郎、高岡で本保義太郎の「西洋美術」へのまなざしを導入するのも、ふたつの地でおおの、より踏み込んで国立西洋美術館のコレクションを見ていただくための企図です。

国立西洋美術館は昨秋から、館内施設整備のために2022年春(予定)にかけて全館休館しています。もし、こうした長期の休館中でなければ、東京・上野の常設展示室を離れて山形 | 高岡へ旅することはできないかもしれない重要な絵画や彫刻も出品いたします。この機会にぜひ、山形美術館 | 高岡市美術館を舞台とする展覧会だからこそ見えてくるはずの、ふだん上野で感じるのとは少し違った国立西洋美術館のコレクションの可能性を、山形 | 高岡の地で見つけていただければ幸いです。

第1章

山形展

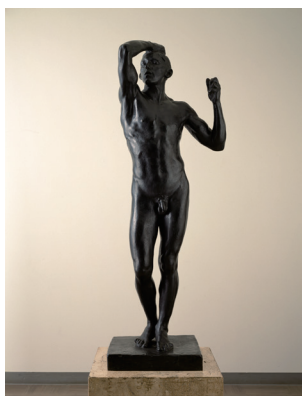
Y1 | 山形生まれの彫刻家が見た〈遠く〉の夢
—— 持ち帰られた記憶たち

高岡展

T1 | 高岡生まれの彫刻家が見た〈遠く〉の夢
—— 持ち帰られなかった記憶たち

展覧会の導入として、山形美術館では新海竹太郎(1868–1927)、高岡市美術館では本保義太郎(1875–1907)の記憶をたどりつつ、彼らが留学時代に眼にしたロダンの彫刻やその他の西洋の芸術家たちの作品などを併せて展示します。新海の場合にはベルリン、本保の場合にはパリで見たであろうものたちの記憶が主となります。彼らは渡欧以前から西洋の「美術史」を知ろうとし、留学先では熱心に「美術館」を訪れてそこを学びの場にしようとしていたことが、各人の足跡から窺われます。

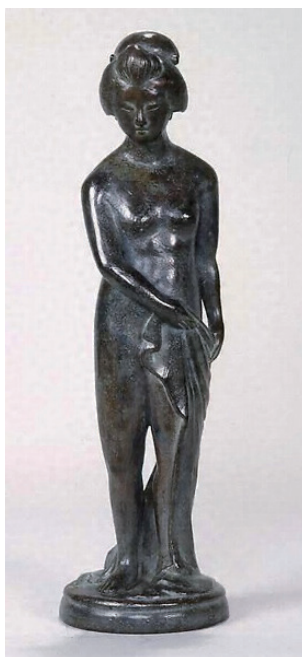
ふたりの西洋の美術館や美術史にたいする過去の視線はそれぞれに、この展覧会のなかで国立西洋美術館のコレクションを見てゆくための、時空を超えた扉となるでしょう。ただし、新海 | 本保が残した〈遠く〉の記憶のありようは、ある意味でとても対照的です。なぜなら新海がベルリンから帰国後にみずからの経験を日本の近代美術にさまざまな還元することができたのに対し、本保はロダンの面会してもまもなく、パリにおいて惜しまれつつ夭折し、自分では持ち帰ることのできない記憶を、かの地に残さずにはいなかったからです。



1



2



3



4



5



6



7

- 1 オーギュスト・ロダン《青銅時代》1877年(原型)、ブロンズ、松方コレクション、国立西洋美術館 | 撮影: ©上野則宏
- 2 大塚楠緒子著/新海竹太郎装幀『晴小袖』(書中にラファエロ、ティツィアーノ、ロセッティ、クリンガー、マルタンらの7点の絵画/版画の複製写真のレイアウトあり) 隆文館、1906年、国立西洋美術館研究資料センター(山形展のみ) | 撮影: ©上野則宏
- 3 本保義太郎《裸婦立像》明治30年代(原型)/1981年(铸造)、ブロンズ、高岡市美術館(高岡展のみ)
- 4 ジャン=バティスト・カルポー《ナポリの漁師の少年》1857-58年(原型)、ブロンズ、国立西洋美術館 | 撮影: ©上野則宏
- 5 オーギュスト・ロダン《フギット・アモール(去りゆく愛)》1887年以前、ブロンズ、松方コレクション、国立西洋美術館(高岡展では第3章に展示) | 撮影: ©上野則宏
- 6 マックス・クリンガー《『ある愛』: 新たな幸せの夢》1887年、エッチング、エングレーヴィング、国立西洋美術館(高岡展では第2章に展示)
- 7 ダンテ・ガブリエル・ロセッティ《夜明けの目覚め》1877-78年、油彩/カンヴァス、国立西洋美術館(高岡展では第3章に展示)

両会場共通タイトル

Y2 | T2

自分たちのものではない記憶のコレクション
—— 日本に「西洋美術館」があるということ

国立西洋美術館は「西洋美術」の収集/保存/展示に特化した日本で唯一の国立美術館です。自国の芸術のコレクションをもたず、非西洋圏にありながら西洋美術の歴史を専門とする「国立美術館」であるという意味では、世界中を見渡しても、きわめてめずらしい機関といえます。そこはいわば「自分たちのものではない記憶」が集められている場——みなさんが、空間的にも時間的にも〈遠く〉にあった過去の事物と出逢い、一様ではない多様な他者の芸術に触れ、さまざまに異なる思想や文化、自分とはちがった世界観や価値観を見つけてゆけるミュージアムでありうるはずです。「西洋美術」と呼ばれるものは、決して一枚岩ではない多様体だからです。

そんな国立西洋美術館は、第2次世界大戦後にフランス政府より寄贈返還されたフランス近代美術を中心とする松方コレクションを母体として1959(昭和34)年に開館しました。ただし、第1次世界大戦期にはじまった松方幸次郎の蒐集の対象には、当初から「近代美術」だけでなく、近代以前の「オールドマスター」の作品も少なからず含まれていました。そして開館から62年が経とうとしている現在の国立西洋美術館には、その後のコレクション拡充の営みをつうじて、ヨーロッパ各地のオールドマスターたちの絵画や版画が数多く収蔵されています。なかにはかつて松方コレクションに含まれていた作品もあります。

こうした国立西洋美術館所蔵のオールドマスターの作品群を、コレクション形成史や美術館設立史の回顧を交えながら多面的にご紹介します。新海や本保らの世代が西洋留学を終えて以後の時代に開始された松方の収集活動や美術館構想、ついで松方コレクションの寄贈返還とその条件となったル・コルビュジエ基礎設計による美術館建設、さらに開館後の所蔵作品の継続的な拡張——それらの歴史を紐解くと、渡欧以前の新海や本保らが夢見たような〈遠く〉の芸術を、若い美術家はもちろん、誰もが日本にしながら実見できるものにしたと願った松方や後続する関係者たちの熱意が浮かびあがってきます。



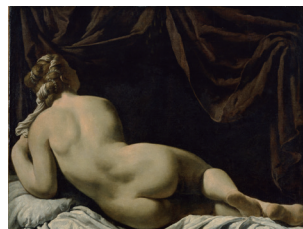
8



9



10



11



12



13



14

- 8 パオロ・ヴェロネーゼ(本名パオロ・カリアーリ)《聖カタリナの神秘的結婚》
1547年頃、油彩/カンヴァス、国立西洋美術館
- 9 アルブレヒト・デューラー《ばったのいる聖家族》
1495年頃、エンブレイヴィング、国立西洋美術館
- 10 エル・グレコ(本名ドメニコス・テオトコプーロス)《十字架のキリスト》
油彩/カンヴァス、国立西洋美術館
- 11 マルカントニオ・バッセッティ《ダナエ》
1620-30年頃、油彩/カンヴァス、国立西洋美術館
- 12 レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン
《病人たちを癒すキリスト(百グルデン版画)》1649年頃、
エッチング・ドライポイント・エンブレイヴィング/和紙、国立西洋美術館
- 13 クロード・ロラン(本名クロード・ジュレ)《踊るサテュロスとニンフのいる風景》
1646年、油彩/カンヴァス、国立西洋美術館
- 14 ニコラ・ド・ラルジリエール《若い貴族の肖像》
1714年頃、油彩/カンヴァス、国立西洋美術館

山形展

Y3 | 〈ここ〉と〈遠く〉が触れるとき

—— 西洋と山形の近代以降の芸術

高岡展

T3 | 〈ここ〉と〈遠く〉が触れるとき

—— 西洋と高岡の近代以降の芸術

近代以前の西洋美術の展開を概観し終えたあとで、最後にふたたび、山形では新海竹太郎、高岡では本保義太郎のまなざしに立ち返りながら、あらたに前者においては吉野石膏コレクションのフランス印象派の絵画、後者においては林忠正の記憶などを焦点として、近代以降の西洋美術を、国立西洋美術館のコレクションと開催両館の所蔵作品等の複数の組み合わせをつうじ、各会場で別個に見てゆきます。

具体的には、新海 | 本保がヨーロッパで学んだアカデミックな芸術をふり返ってみること、ともに岸田劉生を経由しつつ西洋由来の写実主義を追求した山形生まれの椿貞雄 | 高岡生まれの雄山通季の静物画とクールベのレアリスム絵画とを比較すること、あるいは小塚義一郎ら地元の洋画家たちの先駆的な集団であった山形の毒地社、村井盈人らが高岡で結成した北国洋画協会に着目すること、そして林忠正が交わった印象派やジャポニズムの芸術家たちの作品を、その日本人美術商の活動の記憶とともに見つめ直すこと、またそのほかの留学経験をもつ地元出身の画家の仕事と同時代の西洋美術とを並置すること、くわえて西洋各地と山形 | 高岡、それぞれに異なる地でさまざまな時間/時代に描かれてきた雪景色を照らしあわせることなどです。これらの掛けあわせを要所ごとに配しつつ、山形においてだからこそ | 高岡においてだからこそ見えてくるであろう近代以降の芸術の可能性を探ります。



15



16



17



18



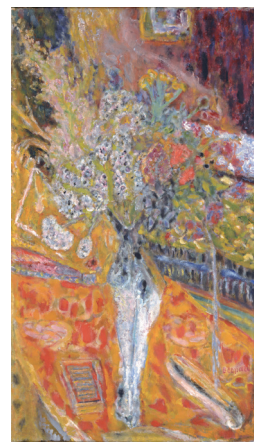
19



20



21



22



23



24

- 15 ウィリアム・アドルフ・ブーグロー《少女》1878年、油彩/カンヴァス、国立西洋美術館
- 16 ギュスターヴ・クールベ《りんご》1871年頃、油彩/カルトン、松方コレクション、国立西洋美術館
- 17 椿貞雄《冬瓜茄子図》1942年、油彩/カンヴァス、山形美術館(山形展のみ)
- 18 雄山通季《李朝の壺》1949年、油彩/カンヴァス、高岡市美術館(高岡展のみ)
- 19 ベルト・モリゾ《黒いドレスの女性(観劇の前)》1875年、油彩/カンヴァス、林忠正の旧蔵歴あり、国立西洋美術館
- 20 アルベール・ソバルトロメ《林忠正の面》1892年(原型)/1987年(鑄造)、ブロンズ、高岡市美術館(高岡展のみ)
- 21 ポール・セザンヌ《ポントワーズの橋と堰》1881年、油彩/カンヴァス、国立西洋美術館
- 22 ビエール・ボナール《花》1933年頃、油彩/カンヴァス、国立西洋美術館
- 23 クロード・モネ《雪のアルジャントゥイユ》1875年、油彩/カンヴァス、松方コレクション、国立西洋美術館
- 24 金山平三《山仕事の帰り》1942年、油彩/カンヴァス、山形美術館(山形展のみ)

ふたりの芸術家の記憶へと手を伸ばすことから展覧会をはじめた。かたや一八六八（慶応四）年に山形で生まれた新海竹太郎、かたや一八七五（明治八）年に高岡で生まれた本保義太郎——ともに地元の仏師の家の出で、やがて上京して上野界隈で彫刻を学び、いつしか西洋の芸術に触れるべく渡欧し、オーギュスト・ロダンのような西洋近代彫刻をいち早く眼にするなどしつつ制作をおこない、日本の近代彫刻史にその名を刻んだ、ふたりの彫刻家の記憶へと。彼らのまなざしをうじて、いまわたしたちが自由には旅しづらい〈遠く〉を考え直してみるために。あるいは〈ここ〉にある芸術が、いくつもの〈遠く〉の記憶を潜ませていることに、あらためて眼を向けるために。そして〈ここ〉にいながらでも、さまざまな時空の距離をもった〈遠く〉について考えつづけてゆける想像力のために。

新海一本保の記憶をたどっていると、つぎのような荒唐無稽でしかない想像が頭をよぎる。彼らはふたりとも、自身の死のはるかち、一九五九（昭和三四）年になって東京・上野公園内に開館することとなる国立西洋美術館の近くを、そうした未来は知らないまま、うつろっていたはずだ。ならば、ふたりがそのあたりを徘徊していた19世紀末から20世紀初頭に、もしそこ

に国立西洋美術館がすでに建っていたら、どうだったのだろうか。東京の上野周辺で過ごした彼らは、その後それぞれ西洋の芸術や思想にじかに触れることを夢見て日本を離れた。新海はパリ経由でベルリンへ、本保はアメリカ滞在のあとパリへと。だが、かりに彼らが渡欧するまえに、上野に国立西洋美術館があったなら、彼らのような若き芸術家たちは、ロダンの彫刻などがいくつも並んでいるその空間のなかでなにを見つめ、いかに考え、自身の制作にどう生かしたのか。ひょっとすると新海や本保は、その美術館のコレクションに満足し、渡欧しなかっただろうか。いや、彼らはむしろ、そこで眼にした異邦の作品たちに刺戟され、もつとたくさんの、より多様な〈遠く〉の芸術に触れたいという思いを強くしたのではないか。

むろん、すべては絵空事である。しかしこうした想像は、日本にいまだ西洋起源の「美術館」がなかった時代に上京／渡欧した新海と本保の記憶を介して、のちに東京・上野に「西洋美術館」が誕生し、こんにちまでコレクションを拡張しながら〈ここ〉にありつづけていることの存立根拠を、山形―高岡の地から問い直してみる作業につながるだろう。

同じ時代を生き、複数の共通の知人さえおり、いつ

かどこかで出くわしていても不思議はなかった新海と本保が、たがいに触れあった形跡は見あたらない。また、新海がベルリン滞在の経験を日本に持ち帰ってき、さまざまな生かしたとすれば、他方の本保は、留学さきのパリで病に倒れ、自分の身体ではなにも持ち帰れないまま、かの地で死んだ。交わりそうで交わらない、触れあいそうで触れあわない、似かよっているようでまるで対照的な、ふたりの芸術家の記憶。そんな彼らの記憶の扉を、両者の故郷、山形―高岡において個々に開いてみると、国立西洋美術館のコレクションからなる、ひとつであったはずの展覧会は、おのずとふた通りに分岐し、別々のものへと組み変わりはじめる。単一のまとまりをなすかに思える「西洋美術」のコレクションは、山形美術館―高岡市美術館という相互にちがった歴史と所蔵品をもつ場に運び込まれ、各地に潜在している記憶たちとそのつど触れあうとき、ふたつの異なる展示の布置をつくりだしうる。

山形で考えるからこそ見えてくるはずの一高岡で考えるからこそ見えてくるはずの、単数ではなく複数の美術史たちの可能性を探りしてみること。机上の空論としてではなく、できれば展覧会を訪れてくださるみなさんとともに、美術館という現場での体験として。

[山形展]

山形美術館

〒990-0046 山形県山形市大手町1-63

開館時間：10:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日：毎週月曜日（祝休日の場合はその翌平日）

*ただし、2021年8月23日[月]は開館。

主催：国立西洋美術館、山形美術館、山形県、山形新聞・山形放送

共催：公益財団法人山形県生涯学習文化財団

後援：山形県教育委員会、山形県芸術文化協会、

山形市、山形市教育委員会、山形市芸術文化協会

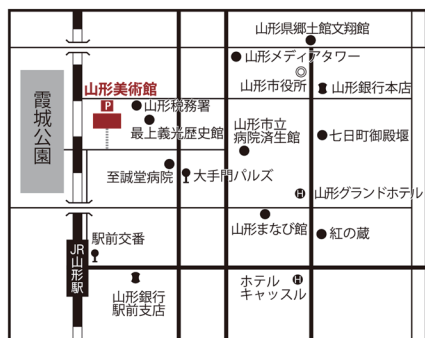
[観覧料]

一般：1,200円(1,000円)

高大生：800円(600円)

小中生：400円

- ・（ ）内は前売料金。
- ・20名以上の団体料金は各料金区分の2割引。
- 会期中の土曜日は小中生の観覧料無料。
- ・障がい者手帳をご提示の方と付添者1名の観覧料は各料金区分の半額。
- ・山形美術館キャンパスメンバーズ制度登録校の学生は学生証の提示により観覧料無料。



[徒歩] JR山形駅(東口)から徒歩15分

[バス] ・山形駅前から「天童(荒谷経由)」行、「山寺」行より約5分、美術館前下車徒歩3分
・ベニちゃんバス「中心市街地」行(約15分おき運行)で約12分、霞城公園(大手門ハルズ)前下車徒歩4分

[自動車] 山形自動車道「山形蔵王IC」から約15分

*山形美術館北側に無料駐車場がございます。

*美術館前の山形市大手町駐車場は有料です。



[関連イベント] イベントにつきましては、今後に発表される開催館のホームページやチラシ等の情報をご覧ください。

[報道関係のお問合せ先]

[山形展]に関するお問合せ

山形美術館

TEL：023-622-3090(受付時間：10:00～17:00 休館日を除く)

E-mail: info@yamagata-art-museum.or.jp

[本プレスリリースに関するその他のお問合せ、国立西洋美術館に関するお問合せ]

国立西洋美術館 総務課事業担当(受付時間：平日9:30～17:00) E-mail: press@nmwa.go.jp

[高岡展]

高岡市美術館

〒933-0056 富山県高岡市中川1-1-30

開館時間：9:30～17:00（入館は16:30まで）

休館日：毎週月曜日（祝休日の場合はその翌平日）

主催：国立西洋美術館、高岡市美術館、

富山県教育委員会、北日本新聞社

後援：富山県、高岡市、高岡市教育委員会、富山シティーエム

[観覧料]

一般：1,200円(前売・団体・シニア900円)

高大生：600円(団体480円)

小中生：300円(団体240円)

親子券：1,400円

- ・団体料金は20名以上。
- ・シニアは65歳以上。
- ・障がい者手帳をご提示の方と付添者1名の観覧料は各料金区分の半額。
- ・会期中の土・日曜日および祝休日は小中生の観覧料が2割引。
- ・「親子券」1枚につき一般1名および小中生2名まで観覧可。



[バス] 北陸新幹線新高岡駅より

富山駅前行バス(高岡駅経由)「中川」下車、徒歩2分

[徒歩] ・高岡駅より徒歩約20分(北東約2km)
・JR氷見線「越中中川駅」下車、徒歩2分

[自動車] 能越自動車道 高岡北ICから約10分、高岡ICから約15分

北陸自動車道 小杉ICから約20分、高岡砺波スマートICから約20分

*高岡市美術館地下駐車場(9:00～18:00)は、2時間まで駐車料金無料。

*高岡文化の森駐車場(屋外)は駐車料金無料。

